

我が家の窓から

ジュ・リエ・ット

雷

我が家は、十階建てビルの最上階、角部屋である。景色だけは素晴らしい。一人で過ごしていた金曜日の午後、突然空が暗くなってきた。買い物に出かけようと、思っていたのだが、雨も降り出した。雨が吹き込まないように窓を閉めようと立ちあがったら、いきなりすさまじい雷鳴がとどろいた。

夕べも雷だった。職場の皆さんと暑気払いをして、九時過ぎに家に帰り着いたら、なんだか空がチカチカしている。風呂上りのビールを楽しんでいた夫と、「雷だ、雷だ」と喜んで、部屋の明かりを消してテレビも消した。しばらくすると、空に稲妻が走り、大音響とともに雷鳴がとどろいた。私達は声もなくこの自然現象を眺めていた。

今日の雷は、昨日よりすごい音がする。風が雨を激しく吹き飛ばし、ビルの壁にびしびし当たっている。道路はすでに川のようになっている。稲妻が空を二分し、すぐそばのビルまで霞んでいるのである。不謹慎だとは思うのだが、私は自分の部屋から雷を見るのが大好きである。きっちり窓を閉め、気が散るテレビを消して、ひたすら空を眺める。都会には、もはや自然は失われてしまったが、この雷だけは、自然界の驚異を示してくれる。日食も、月食も、流星群でさえ、これほどの迫力を持つてはいない。時を忘れ見入ってしまった。運がよければこの後に、すばらしい虹を見ることができはすである。空が、パーッと明るくなり、雲がちぎれて青空がのぞくと、南東の空にくっきりと現れる。今日もそんな風になればいいのだけけれど……。

そうそう、私は、夏の入道雲も好きである。長野の実家に行った時、聞こえてくる蝉の鳴き声をうっとおしく思いながら、川の土手でひっくり返って空を見ていた時のことである。真っ青な空に、もくもくと湧き上がる入道雲があった。それはす

ごい勢いで、どんどん形を変えていくのである。この時も、時間を忘れじっと眺めていた。心の中では、こんなことに時間をつぶしているのだろうかという思いがよぎったのだけれど、もう少しだけ、もう少しだけと。気がついたら日が傾き夕方になっていたが、とても満足した気分になったことを覚えている。今なら、そんなことは、決してできない。このほか、台風も、雪も、好きである。じっくり眺めることができるのならばの、話であるが。でもやはり、雷に勝るものはない。

このように自然の驚異に心を奪われてしまう私ですが、被害にあわれた方、申し訳ありません。決して災害が好きだということではなく、自然の持つ力が私には、とても大きくすばらしく、抗いがたく感じられるのです。

台風

夕べは季節外れの台風で、外はすごい風と雨だった。「台風二十一号は午後八時半ごろ川崎市付近に上陸した模様で……」ニュースで繰り返し警戒を呼びかけていた。私は、民放の報道が気に入らない。「○○からの中継です、ごらんのようにすごい風です、立っているのがやっつとです……」と絶叫しながらバックの風景は、碎け散る波と大荒れの海、あるいは大揺れに揺れている街路樹や吹き飛ばされた傘の映像。「危ないよ、そこまでしなくていいから叫ぶのはやめて」と舌打ちしたい気分させられる。今年はこのほか暑い夏で、ようやく秋になったと思ったらこの台風。ヨーロッパや中国の洪水騒ぎも記憶に新しく、なんだか地球的規模で災害が起きていようような気がする。

テレビを消して早々に床に就いたものの、夜中にトイレに起きた（午前二時頃）窓の外に三日月が見えた、空はすっかり晴れ上がり台風は去ったようである。窓を開け外に出てみると南東の空にオリオン座がくつきりと見えた、下で輝いている星は多分大犬座のシリウスだ。こんなにきれいに見えるなんて珍しい。しばし夜の空に見とれてしまった。

台風の後の道路はゴミの山、強風で壊れた傘が、何本も道路に捨てられている。あちこちに散乱したゴミも、普段はどこに隠れていたのだろうかと思う。子どもの頃、台風の後の増水した川に、夏みかんの皮や生ゴミ、どうかすると仔豚の死骸まで流れていたことを思い出す。台風は地表に発生した病気の治療を、地球それ自体の意識で行う浄化作用と捉えたらいいのだろうか。汚いものを全部吐き出してきれ

いにならうとしているように思われる。

心の中も同じである。日頃溜め込んだ悲しいこと辛いこと嫌なこと、全部吐き出したらすっきりするに違いない。だけどそれがなかなかできないので皆、苦しみ、悩み、のたうちまわる。ようやく見つかった私自身の治療法は、文章を書くことである。書くことで心を整理し、気持ちを落ち着かせることができるようになった。そしてそれを読み返してみると、その時その時の、心の動きが見えてくる。気持ちが楽になる。

たとえば、我が家に生息している恋する乙女は、親の言うことに「聞く耳持たず」である。台風で激しい雨の降る中、「どうしても行かなければならない」と言っておかけていった。止めたって聞かないことはわかっているが「明日にしたら」と言ってみる、小さく「行ってきます」とつぶやき出て行った。「気をつけて、怪我のないように」と祈るばかりである。こんな嵐の中をそこまでしていかなければならぬなんてホントにもう、腹の立つことばかりの毎日。あ、そうそう文章を書こう、落ち着こう。

雪の朝

朝起きるとすごく寒い、先に起きていた夫が「雪が降っているよ」という。窓からのぞくと、一面雪景色になっている。天気予報で雪が降ると言っていたので、驚きはしなかったが、やはりきれいである。朝から吹雪いてはいるが、寒さより美しさにうっとりしてしまう。しばし十階からの景色を楽しんだ。

犬ではないので、駆け回るわけには行かないが、なぜだか心ウキウキしてくるのを感じる。出勤のため急ぐ足元にいつもより注意を払って、ウキウキ気分を戒める。

私の職場は、二十一階なので、自宅よりさらに眺めがよい。西に向かう窓から外を眺めると、いつもは見えている富士山は形もなく消えている。窓の下は皇居の森が見える、知らないうちに紅葉していたのだが、今日は雪に煙っている。そういえば、朝家を出るとき隣接する六義園の木立も真っ白な雪で覆われていて、とてもきれいだっただ。

帰ってきてテレビをつけると、記録的な雪だといっている。けが人二百人というではないか、びっくりである。朝出かけるときニュースで言っていた、歩幅を小さく、ポケットには手を入れない、マンホールの上や駅の階段は滑りやすいので注意

するようにと。ところが、寒いと言いなながら帰ってきた我が家の息子は、このニュースを知らずに出かけて行ったようで、危うく二百一人目のけが人になるところだった。話を聞くと、駅までたどり着く前に、急いで歩いて転倒し、頭を打ったという。幸いニット帽をかぶっていたので、痛いだけで、済んだようだが。乗ろうとした電車は三十分遅れ、二限にギリギリ間に合う時間に着いたが、授業は休講になったとのこと、そんなものだよな。

卒業式間近になってやっと大学の合格通知を手にした息子、今年は駄目かと、あきらめかけていた矢先のことなので、突然降って湧いたようなうれしい出来事だった。

振り返ると、今年は何でも突然やってきた。娘がお正月にお付き合いをしている人を我が家に連れて来た。その折、話題の一つとして海外旅行の面白さ、得る物の大きさを話題にした所、後日一人で旅行に行くといってきた、出かけた先はヨーロッパ。そしてお付き合い一周年記念のペアリングをもらって姫君のように微笑む娘。就職を決めた彼について行くと決めている。猛暑の後の短い秋、そして急に寒くなりこの大雪である。今年是这样いう年回りだったのね。

夜明け

年齢のせいだろうか、この頃目覚めが早い。布団の中でぐずぐずしているのもしいのだが、ぱっと起きることにしている。今朝も、五時に目覚めてしまった。外を見ると東の空がほんのりオレンジになっている。オレンジと夜空が溶け合うこの時間は、まさに夜明けである。

わが家の窓からは、一八〇度の東京のパノラマが楽しめる。少し寒いがベランダに出てみると、上空には三日月があり、名も知らぬ星が輝いている。東から南そして西へと目とゆっくり目を転じると赤いランプの点滅するビル群が「ここは都会だよ」と言っている。部屋に戻りコーヒーを片手に再び外に目をやると、空が明るさを増し、点滅していた赤いランプは輝きを失っている。さっきまでのあの美しさは目を離れた一瞬のうちに消えてしまっている。ぐんぐん明かりをます東の空から、約束を裏切ることなく最初の太陽の光が差し込む、一日の始まりである。いつもこの景色を「きれいだね」と夫と二人で楽しむ。そしてこの夜明けを何度でも楽しむことができる幸せを語るのである。

夕暮れもいいものだが、美しい夜明けを見ると、今日も元気に生きていこうと思える。落ち込んでいる時、明けてくる空を見てみると、太陽の最初の光が私を包み込む。「人生って嫌なことばかりではないよ」と。窓から見える一八〇度のパノラマは、季節が移り時が過ぎても、いつでも新しい夜明けを見せてくれるだろう。この先どんな悲しみが待ち構えているのかわからないが、私はこの太陽の最初の光を浴びることにより、心を奮い立たせることができると思える。